

巻頭言
Greeting

×

佐藤 源
Gen Sato
聖書宣教会 理事

Profile

1948年宮城県生まれ。農林水産省で30年勤務した後、会社役員13年務める。2013年行政書士登録し、ぶどうの枝行政書士事務所を開設する。JECAぶどうの樹キリスト教会会員。



「新型コロナと福音」

この2年間、新型コロナが世界中で猛威を振るいました。この原稿を書いている11月初め現在、日本では少し落ち着いてきた様子ですが、世界では依然として感染が広がっています。諸教会の礼拝も、会堂に集まることを取り止め、ZoomやYouTubeを用いて、自宅でのWeb礼拝として行われることが多くなりました。

パンデミック(感染症の世界的流行)は人類の歴史と同様に古いと言われます。14世紀のヨーロッパを中心に流行したペスト(黒死病)や100年前のスペイン風邪はよく知られています。パンデミックにより世界の歴史は大きく変化し、教会もそれまでの「権威」が失墜し、大きな変貌を遂げたと言われています。

信仰者はパンデミックを単なる自然現象とだけ捉えるのではなく、神様の主権の下で人類に悲惨な状況をもたらすことがなぜ起こるのかと考えてしまいます。旧約聖書、特にエレミヤ書やエゼキエル書では、神様に従わない人々に対し、「剣、飢饉、疫病」によるさばきのあることが、預言者を通し繰り返し警告されています。しかし、イスラエルの民はそのことばを受け入れず、神様の前に罪を犯した結果、「バビロン捕囚」となり、国を失いました。これは私の個人的な見解ですが、神様はパンデミックの現実を示しつつ、その時代における人間の罪深さに対し警告を発しているように思います。現代は被造物(中でも自然環境)が人間の強欲により収奪・破壊され、その結果、地球温暖化などに見られるように、人類

が「破滅」の淵に立たされています。今こそ、人類はこれまでの生き方を改め、神様が指し示す道に歩むことが求められているように思います。

イエス様の福音は更に大きな広がりと深さをもって私たちに迫ってきます。イエス様の十字架と復活により主を信じる者の罪はすべて赦されると聖書は語ります。イエス様は生まれながらの盲目の人に、「神のわざが現れるため」(ヨハネの福音書9:3)と諭します。また、ラザロの病気について、「神の栄光のため」(ヨハネの福音書11:4)と仰せられました。イエス様は死に打ち勝ち、永遠のいのちを約束されました。イエス様に信頼するとき永遠に生きると聖書は語ります。もちろんキリスト者もパンデミックから逃れられるわけではありません。しかし、信仰者はこの世に在ってそのような現実と向き合いつつ、福音を宣教し、隣人愛を行い、神様を証しする者とされたのです。

教会は、2年間に及ぶ新型コロナの中での貴重な経験を活かし、新たな宣教と愛のわざに生きることが求められています。このような中、聖書宣教会がますます学びを豊かにし、教会の働きに一層仕えていくことを祈っております。

No.186 Topics

- p03 秋の恵み：リトリートから
- p04 コロナ禍の教会奉仕
- p05 家族寮の交わり
- p06 オンライン聖書講座の恵み

赤坂 泉

Izumi Akasaka
聖書宣教会 校長

「再開すると、前期末の10月初旬まではあつという間」と前回号に書いた通りに月日は流れ、さらに進んでもう12月です。慌ただしさに浮き足立って、あふれている恵みに気がつかなかつたり、感謝と賛美を後回しにしたりすることがないように、主の助けを仰いでいます。

学舎の秋は、前期末の試験や課題、調整期間とリトリート、後期開始からのオープンデイ等々、彩り豊かです。色づいていく木々や山々に向かって目を上げ、万物を保持しておられる創造主の御手に導かれていることをゆっくり噛みしめながら進みたいと思います。

皆様のところでは、どのような秋を過ごされたでしょうか。緊急事態宣言等が解除され、諸集会・活動にかかる判断や選択を重ねておられる主の民、主の教会に、天来の知恵と平和が加えられますようにお祈りします。

研修生たち

研修生一同、ここまではコロナ感染から守られ、学びと訓練にあずかってきました。主に感謝します。ただ、寮生活や教会奉仕などで様々な変則は続いており、研修生活の継続性や熟達という面で課題も残ります。各々、制約下での最善を選び取って行けるようにお祈りください。卒業予定者には学舎での最終工程です。主がなお練り上げ、主の用いやすい形の器に整えて遣わして下さることを楽しみにします。

家族寮には、懐妊の報など変化が続きます。リトリートには夫人たちも参加して、普段とはまた違った学びと交わりの機会を得ました。

後期の「祈りの日」の説教者は中村敏先生です。一人ひとりが主の前に出て、主との交わりを深める機会です。毎日、毎週、手のわざを止めて

主の前に出るリズムに加えて、折々に取り分けるこうした機会もとても幸いです。皆様にもお勧めします。独りで、あるいは教会としていかがですか。

献身者の必要

新年度の入会志願者も少しずつ顔が見えてきています。主の畑の働き手として新たに加えられる方々がもっとも必要です。一方に、主の摂理のなかで先に天の御国に移される伝道者がいます。伝道者の高齢化も顕著です。日本と世界の宣教のために献身者が起こされるように祈りましょう。学舎の教職員の次代の必要のためにもお祈りくださり感謝します。これも主と主のわざへの献身です。主が起こして下さるよう祈っています。

卒業生の問安やみことばの奉仕、学舎紹介のために当方の予算で出かけて参ることもできます。ご相談ください。

キリストを喜び祝う

賛美礼拝は、今年もオンライン配信を基本に主にささげました。結果、その記録を限定配信でクリスマス頃まで視聴していただくことができる予定です。学舎のウェブサイトからお探しくんだり、待降節にキリストを喜び祝う一助としていただければ幸いです。

諸教会、皆様にとって、祝されたクリスマスとなりますようにお祈りします。

どうか教えてください。

自分の日を数えることを。

そうして私たちに 知恵の心を
得させてください。

(詩篇 90:12)



02 秋の行事から Retreat 2021

菅家 容子

Yoko Sugaya
講師

皆様と過ごした2日間は大変密度の濃い時間でした。事前に木津夫妻、奥田姉と2回ズームで準備の時を持たせたことがとても助けになりました。たっぷりの時間を頂き、宣教の働きを紹介するとともに、主が私たちの人生にどのように介入し、教え、諭し、戒め導いておられるか存分に証しする機会が与えられました。前期の課題を終えたばかりで睡眠不足の方が多かったにも関わらず、皆さん大変真摯に耳を傾け応答してくださいました。皆さんの分かち合いは今も私の心にこだましています。知性においても心においても生活、また関係においても、福音が皆様の歩みに深く根をおろし、豊かな実が結ばれますように。皆様との出会いを心から主に感謝しつつ。



奥田 智子

Tomoko Okuda
聖書神学舎本科2年

神様は菅家庄一郎先生、容子先生ご夫妻をリトリートに送って下さいました。「あなた方はわたしの証人」というテーマのもとに、イザヤ書43:10~12のみことばをいただき、①宣教とは②世界宣教/女性の働き人③献身者とは④個人伝道という角度から、聖書と先生ご夫妻の証を通して学びました。

世界宣教の必要性、現状に始まり、先生方の救いから宣教師への召し、カンボジア時代、現在から家庭生活全般にわたってお二人に働いてくださった神様が証しされました。二日間、先生ご夫妻の素朴なそのままの生き方を見せていただきました。神様が人をそれぞれ御手の中で練られて、神様のご栄光を現わす器として造り変え、用いてくださる恵みを見せられ励まされました。

遣わされた主の神学生

松村 隆

Takashi Matsumura

川口中央福音自由教会牧師・元ウィクリフ聖書翻訳宣教師

石川礼神学生は、私たちの教会に遣わされて来て以来、この2年間、若い力で教会学校、子ども食堂、祈り会、礼拝説教など素晴らしい奉仕をして来られました。教会に濃厚接触者が出たときは、聖書宣教会の素早い対応を頂いて感謝しています。

ウィクリフ聖書翻訳協会の宣教師になるために宣教会に入会したと聞いていましたが、石川神学生は、主の召しを再確認しつつ学んでいます。数年前から主は私を、みことばに従う弟子として成長しながら、同時に、主の弟子を育てるように導かれてきました。ウィクリフも、単に聖書を翻訳するだけでなく、たましいの救いと教会の成長を目標とする団体です。その大切な働きの将来を担う姉妹として石川神学生を主の弟子として訓練させて頂きたいと思っています。

その一つは英会話を一緒に学ぶ未信者の方に、普

通に友人として関わりながら学んでいく事です。4ヶ月経って、その友人は、一步踏み出しました。「教会は、聖書を学ぶだけってできますか。英会話の最後に聖書を教えて下さっていて自分の生き方に適用できる。興味あるので学びたい。」

もう一つは、人を実際に救いに導く事です。いつ求道者の方が与えられても対応できるように7人のグループが祈ってきました。最近ある男性が礼拝に来て、聖書を学び受洗したいと語り、石川礼神学生が中心になり私と二人でその方と聖書を読んでいます。どこへ行ってもイエス様を伝える人としてここから旅立って欲しいと祈っています。

変わるものと変わらないもの

石川 礼

Rei Ishikawa

聖書神学舎本科3年

川口中央福音自由教会での奉仕は最初からコロナ禍にありました。2020年4月はちょうど1回目の緊急事態宣言が発令された頃で集まることができず、祈禱会のみ Zoom で行うという形式でした。ただ、元々祈禱会に参加できないはずだった私にとっても、また遠方に住んでいるために祈禱会の参加を諦めていた教会員の方にとっても、実際コロナに感染したり濃厚接触者となった方にとっても、オンライン参加が可能になったことは大変大きな恵みでした。対面礼拝が再開してからも、礼拝や祈禱会のみならず総会や伝道部会でもオンライン併用になり、密にならずに顔を合わせて集まることができています。

土曜の奉仕に関しては、月に一度開催される子ども食堂はお弁当販売という形にし、地域の子に遊び場と

して教会を解放する「ほっとスペース」と絵本読み聞かせの「おはなしたまご」は感染対策をして継続しています。コロナ禍で通常より厳しい経済状況にある家庭には、リーズナブルなお弁当は大変喜ばれ、また交流の機会に飢えている子どもたちは、ほっとスペースに来るのを楽しみにしてくれています。

コロナだからこそ変えなければならないこともあれば、より必要とされていることもあります。私も初めのうち、活動を続けることに多少不安がありましたが、人々の必要に愛をもって応え続けていくことこそ、コロナ禍での伝道のあり方なのだと思うようになりました。小さく続く地道な活動にもキリストの愛がじんわり滲んでいることを感じます。

04 家族寮の交わり Families on Campus



(左から、林、阿部、木津、鞭木、大橋、寺村、朴)

主にある心からの交わり

たまえ

木津 珠江

研修生夫人

家族寮の皆さんとは、すぐ近くに住み、助けが必要な時には頼り頼られ、家族ぐるみで多くの時間を共に過ごす関係。主にある交わりができ、祈り合える関係。この特別な関係を神様に感謝しています。

共に多くの時間を過ごし、お互いのことをよく知るうちに、自分との違いも見えてきます。その違いを肯定的に受け入れられたら良いのですが、そうできないときもあります。つい相手も自分と同じ考えをするのが当然のように思ってしまう。同じクリスチャンでも、様々な違いがあるのは当然なのに。二年半前の入会当初の私は、自分と違うタイプの人たちとはクリスチャンであっても距離を置こう、その方が楽だ、と思っていたように感じます。しかし、それではこの世の人間関係と全く同じ、本当にそれでよいのだろうか、家族寮で二年半過ごす

中、考えさせられる機会が多くありました。また、いつも人の良い部分を見て、相手を受入れ愛している、そんなある姉妹の姿からも多くを教えられました。それとは反対に、違いにばかり目を留めて、相手を受愛そうとしてこなかった自分に気がつかされ、悔い改めました。

今までの家族寮の生活を通して、少しずつ人との関わり方を神様から教えられています。同じ神様に愛され、赦された者として、本当の意味で、互いに受け入れ合い、愛し合うとはどういうことなのか。主にある心からの交わりができる恵みと喜びを、少しでも多く家族寮の中で体験していきたいと願い祈ります。

みことばを学ぶ機会の提供

芳田 秀貴

Hidetaka Yoshida

前期講座講師、JECA前橋キリスト教会 牧師

2021年度前期の聖書講座もオンラインで行われ、24名の受講生が様々な地域から、最も遠いところでは福岡から集いました。講師である私も群馬の自宅から講座を提供することになりました。このように受講する側も、講師の側も地理的な制約を越えられることは、オンラインの大きな利点です。

実際の講座では、私自身がオンラインに不慣れでもたつくことがありました。通信が不安定な時は、そのことに気を取られることもありました。そして、画面越しではどうしても受講生の反応が分かりにくく、相互のやり取りに難しさを感じることもありました。しかし、そういった環境でも受講生の方々は、毎回真剣に聞いてくださり、メールやチャットで質問もしてくださいました。このように意欲的にみことばを学ぼうとする受講生の姿に、私自身がとても励まされました。

みことばの学びを強く求めておられる方はまだまだ全国におられるのだと思います。ある受講生がこのような感想を送ってくださいました。「こうした聖書の学び(特に旧約)は…一般信徒には機会がなく、これはコロナ禍で与えられた恵みです。…『ただ聖書を学びたい』だけなのに機会がありませんでした。」このような思いを抱いておられる方に届いていけるのがオンライン講座なのだと思います。聖書宣教会のオンライン聖書講座が、さらに多くの方にみことばを学ぶ機会を提供する場となることを祈っています。

昼はこの雲の柱が、夜はこの火の柱が、あなたがた民の前から離れることはなかった。

星野 耕樹

Kouju Hoshino

高崎キリストチャペル

貴重な聖書の学びの機会が与えられました幸いを、主にそして聖書宣教会の皆様方に感謝します。

今回、芳田秀貴先生による「出エジプト記」を4月からオンラインで受講し、恵みを分かち合うことができました。「ことばの人ではない」と逃げ腰になるモーセを神様はどのようにお用にいられたか、強情な民にかかわり続けられ、これほどまでに細かく、繰り返し律法を啓示されたのかを改めて知ることができました。「あなたがたのただ中に住む」ことを約束された主の真実を丁寧に講義してくださいました。私たちがみことばを読むとき、歴史的な背景、原語、関連する箇所、前後の段落の中でとらえていくという基本も改めて教えられるました。

芳田先生の温厚な人柄からにじみ出る語りと丁寧な

釈義のおかげで、みことばを学ぶ楽しさとともに厳肅さを味わうことができました。内村鑑三が「今日では出埃及記の大意並びに中心的真理を紹介した。殊にこの書に由りモーセ伝を学ぶ必要を力説した。自分までがアマスト時代の若さに返ったように感じた…モーセの生い立ち並に青年時代に就て述べて自分は今日すっかり若返って仕舞った」と日記に書いています。私も学生時代の聖書研究会の時の熱い思いに戻れたようです。聖書を私の思いで読むのではなく、主の御思いで読むことができますように。

05 オンライン聖書講座の恵み
Blessings from the Online Bible Seminar

今から100年程前、日本のキリスト教会内でホットな話題となっていたと思われるのが「再臨」です。内村鑑三、中田重治、木村清松によって1918年に東京で始められた「再臨運動」は全国各地に波及し、約一年半続きました。1918～20年に起こったスペイン風邪の世界的大流行も、再臨運動の展開に拍車をかけていたようです。

この「再臨運動」で大きな影響を受けたのは、内村鑑三よりもむしろ中田重治の方でした。「再臨運動」が東洋宣教会ホーリネス教会全体のリバイバルにつながり、さらに教会の大分裂にまで至ってしまったからです。その原因は再臨問題の解釈をめぐる、中田と聖書学院教授らの間に対立が起こってしまったからでした。良い意味でも悪い意味でも「再臨運動」の影響を一番強く受けたのはホーリネス教会だった、ということになります。

日本キリスト教史においても当時の重要出来事として取り上げられることの多い「再臨運動」なのですが、実はキリスト教会全体のこの運動に対する反応は冷ややかなものでした。「再臨」があまりにもセンセーショナルに取り上げられてしまったこと、さらに無教会やホーリネスが、当時の主流の教会からは「傍流」のグループと見られていたことなどが原因として考えられます。せっかく「再臨」が当時の教会内で大きなテーマとなっていたのに、「再臨」そのものに対する聖書理解はあまり深まりませんでした。そのことが次の時代に問われることになります。

その後、日本は急速に軍国主義色を強め、戦争の時代に突入します。そして1942年6月のホーリネス系教会に加えられた大弾圧。その理由は地上再臨の教義が、天皇制に衝突する思想であると国家から断定されたからでした。

弾圧されたのはホーリネス系教会でしたが、その時、日本の教会全体が弾圧されたと考えるべきでしょう。地上再臨を強調するホーリネス教会との違いを鮮明にするために、「宗教の本質は精神界のことであるから、天皇制と衝突しない」との立場に立った教会が多くあったそうです。当時の教会の再臨理解が国家から挑戦を受け、振るわれたのです。

このように日本キリスト教史を丁寧に学んでいく時に、再臨についてどのように理解しているかは、私たちにとっての歴史的な課題であることが見えてきます。「再臨運動」から100年の時を刻みました。今「再臨運動」は起こらずとも、私たちは再臨の希望に生かされ、神のご計画の中であって、歴史の方向を指し示す者でありたいと願われます。

○ 聖書学研究所報告

津村 俊夫

Toshio Tsumura

聖書宣教会 聖書学研究所 所長

研究所の活動の一端をご紹介します。月例の研究会では、会員(2人)・準会員(1人)が研究の進捗状況を一人30分から45分発表し、それに対して所員達がコメントをする形式で行われています。トピックとしては、メソポタミアの「疫病」と聖書の関係(田村)、マラキ書の談話文法と論理展開(星野)、詩篇の並行法におけるヘブル語動詞(伊藤)等です。10月には赤城先生にゲストとして「マタイ2:18の旧約引用の問題」の研究発表をしていただきました。所員達は、「七十人訳聖書と新約に於ける Verbal Hendiadys の用法」(三浦)、「カナンに於けるエル祭儀の問題」(津村)等について研究を続けています。所長の長年の研究の一部として『ヘブル詩の文法～聖書ヘブル語の並行法について～』が、ひつじ書房から来年早々に出版される予定です。研究所から出版助成をいただきました。

コロナ禍の中、以前に増して、国境を越えてオンラインによる研究協力の道が開かれ、世界各国でズーム講演会や研究会が行われています(日本からの参加は深夜になり少し大変ですが)。11月末の米国サンアントニオでの「聖書学会」は、オンラインのセッションと対面のセッションがあります。私は予め研究発表を録画し当日発表するという方法で参加します。このような新しい環境にあって、会員の論文審査は、海外の学者の参加を得て一定の水準を保つことが出来るようにと計画しています。

これからも研究所の継続的な研究活動のためにお祈りください。1)月例の研究会が有益な研鑽の時となるように。2)所員、会員・準会員のため。牧会・教育との両立が行われ、健康が支えられるように。3)諸費用(書籍・資料購入、出版助成、人件費、奨学金)が満たされるように。4)研究のために、主から重荷を与えられる方々が起こされるように。5)海外の研究機関との協力関係が実現するようにもお祈りいただければ感謝です。

○ 近況と祈りの課題

- 皆様のお祈りとお支えを感謝しています。コロナ対応の続く日々ですが、学舎では、昨春来、様々な制限をかけ、一部オンライン授業等も併用しながらも、全寮制の教育を継続してきました。“第五波”渦中の調整期間明けと授業再開に際しては、全員の抗原検査を実施等して、できる限りの注意を払っています。一同の霊肉の健康のためにどうぞお祈りください。
- 10月にはパイプオルガン協力会主催のコンサートも開かれました。通常の1/4以下の座席数で二部制、演奏者はPCR検査の上で。今後も、会場使用や会場提供には都度の判断が要ります。
- 今年度の卒業予定者は7名です。主の召しに応答してここまで進んできた者たちの、今後の働きのためにお祈りください。
- 来年度の学舎のためにお祈りください。献身者が大勢起こされるように、その中からこの学舎にも主の選びの器たちが導かれて来るように。
- 拡大教育は後期もオンライン聖書講座を提供しています。教師会では、今後の拡大教育の可能性、継続教育の可能性について考えています。
- 経済的な必要のためにお祈りくださり、ありがとうございます。諸教会の経済も、主が祝福し、強くしてくださいますように。